家庭科部会

県研究主題 家族の一員として生活をよりよくしようと主体的に工夫する能力や実践的な態度を育てる 学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　横山　友子（県央地区）

＜研究主題＞ 実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようとする子どもの育成をめざして

１　提案内容

（１）　季節ごとにオリエンテーションを実施する。

それぞれの季節について、連想する事柄（その季節ならではの自然環境、食べ物、行事などをウエビングし、その後衣食住の各項目についてまとめた上で、意見交換を行う。

・日本の季節ごとの特徴や、工夫について考えられた。
・友だち、家庭、地域の工夫を知り、近隣との関わりから自分の生活を見直せた。
・目的をもって身の回りを観察し情報を収集して、家庭生活への関心を高められた。

（２）　家庭・地域との連携をはかる。

家庭との連携を意識し、アンケート、インタビュー・ワークシートの感想記入の協力を求めた事により、日常の家庭生活における実践に自然とつながるようにした。

・家庭との連携により子ども達の認められる場が増えた。
・地域の「食」に関わる話を聞くことで、調理に対する関心を高めるだけでなく、３Ｒの話から「衣」について考え、物の選び方と環境に配慮した物の活用が、関連することを実感した。

（３）　環境に関する内容を取り入れる。（施設見学・講義）

学校給食センターの見学、再生固形燃料についての講義、綾瀬市リサイクルプラザの見学を通して、日常の食事の大切さや、環境問題に対する工夫を知ることで、自分たちにできるよりよい行動について考える。

・給食が徹底した衛生管理のもとゴミを出さない工夫をしている事を知り、家庭生活や調理実習でも環境に配慮することを実感し、よりよい行動について考えた。
・リサイクル活動などの環境に配慮した取り組みに対する関心を高めた。

（４）　他教科との関連をはかる。

総合的な学習の時間では、季節折々の作物を作り、「地産地消」を実践し、外国語活動では、コミュニケーションを図る楽しさを体験しながら３Ｒを身近なものとして捉える活動をする。

・自分たちが育てた作物を食材にすることで、実践意識が高まり実習材料を無駄に使うこともなくなりゴミの減量につながった。
・外国語活動を通して３Ｒの違いに理解を深め家庭生活で実践していく気持ちを高めた。

（５）　言語活動を充実させ、学び合いの場を多く取る。

自分自身で見たり、感じたりしたことを説明する場面や調べたことを発表しあう場面を

生かした授業を進め、意見の共有を図りながら考えをまとめたり、施設見学の時には、質問事項をまとめ課題を明確にし、主体的な活動となるように図った。

・ 説明をしたり、意見を述べたり、それを聞いたりする機会を多く経験することが、生活の様々な言葉を実感を伴って理解する活動につながり、コミュニケーション能力を育む面でも有効であった。

2　協議内容

（1）　年間指導計画について

・季節折々の作物を使った実践をしたことは素晴らしいが、２年間を見通して、内容が重複しないように、計画を立てていけば良かった。中学までも見通して実践していくとさらによい。施設見学でも同様の事がいえる。

・年間４回の味噌汁を実践したが、旬の野菜のおいしさや、伝統的な食事を習得させることができた。

・年間指導計画について、地域によって違うが、横浜→全市で同じ。川崎→Ａ・Ｂ案があり学校行事・児童の実態などを考えて実施していく。

（2）　家庭科の中での言語活動について

・グループで計画・実践するのではなく、一人で実践していく。その中で、自分の計画等を相手に話すことにより、会話の機会を広げている。

・家庭科で使われる専門的な用語（ゆでる、塩加減、手入れなど）をしっかり教え、会話の中で実践させていく。

・子ども同士が学び合い、コミュニケーションを取りながら伝い合える子にしていきたい。

・言語活動が成立するような場の設定が大切。他の子の実践を聞いて、自分の実践に広げていく事ができる。

3　まとめ

・現在体験不足の子が多い。学習意欲をもたせて家庭科の学習に取り組ませ、それを家庭でも生かして実践させることが大切。その為に実態の把握をしてほしい。

・他教科（総合的な学習の時間など）からも実践を取り入れると実感をもたせた活動ができる。また時間数が少ない部分も補うことができる。

・言語活動の充実を図ってほしい。思考・判断力、表現力が低い。言語活動そのものが目的ではない。言葉を用いて話し合い、グループなどで話し合うことが大切。言語を戦わせるのではなく「そうか」「なるほど」など認め合うことで、生活をよりよくすることができる。

提案２　　提案者　　寺山　範子（横浜地区）

＜研究主題＞
「主体的な学びを導く　問題解決的な学習の工夫」
～「しっかり教え、しっかり引き出す指導」の充実～

１　提案内容

社会的な背景の中、子どもたちを取り巻く環境が多様化し、新学習指導要領でも「生きる力」をはぐくむ教育が求められている。そのため、確かな学力や豊かな人間性をはぐくむ教育を推進するために、基礎的・基本的な知識・技能及び学び方を「しっかり教え」、子どもの関心・意欲や資質・能力及び、よさ・可能性を「しっかり引き出す」ことが必要と考える。「しっかり教える」ためには、子どもの実態に応じて、意図的・計画的な指導計画を立てることや、実践的・体験的な学習活動を重視する。「しっかり引き出す」ためには、自ら課題を見いだし、解決を図る問題解決的な学習活動を充実させることが大切だと考え、テーマを設定した。

２　テーマに迫るための手立て

（１）　指導内容の明確化

本題材での「しっかり教える内容」とは、手縫いによる目的に応じた縫い方、製作に必要な用具の安全な取扱い、目的や課題をもって製作する学び方である。「しっかり引き出す内容」とは、針と糸を使って製作しようとする意欲・用具の安全な取扱いを心がけて製作しようとする意欲、仕上がった作品を日常生活で使いたいという思いや次の作品への意欲などである。これを明確にし、具体的に１時間ごとの指導と評価の計画を作成する。

（２）　題材構成の工夫

指導内容を明確にした上で、指導と評価の計画を作成する際には、子どもの思いや育ちを考えて中学校までの５年間を見通した題材構成をしていくことが大切である。Ｃ（３）「生活に役立つものの製作」の指導にあたっては、基礎的なものから応用的なものへ、簡単なものから難しいものへ、要素的なものから複合的なものへと次第に発展するように題材を配列することが大切である。本題材では、子どもたちが作品の製作を通して繰り返し取り組むことで、無理なく手縫いの基礎的・基本的な知識及び技能をしっかり習得できるようにするとともに、１時間ごとの指導で身に付けた力を活用する場面を意図的に取り入れるようにする。年中行事や宿泊体験学習との関連を図り、子どもの生活に寄り添った題材配列を工夫する。

（３）　評価場面・評価方法の工夫

評価規準の設定は、基礎的・基本的な知識及び技能が習得されているか、習得した知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等がはぐくまれているか、主体的に学習に取り組む態度が養われているか、を判断する内容で総合的に行っていく。本題材では、教師の示範や視聴覚教材で縫い方を知る場合、話し合いの場面、子ども達同士で学び合う場面、自分なりに考えたり、工夫したりする場面などを評価場面とした。評価方法として、１時間毎に評価規準を明確にし、子ども達の発言や行動・作業を観察したり、学習カードを読み取ったりしていく。学習の流れに合わせて子どもが自己評価や相互評価できるように、例を提示したり、学習カードを工夫したりすることで、自ら課題をもって製作していけるようにし、子どもの思いやよさを把握していくことができる。

3　協議内容

（1）　「新学習指導要領に沿った年間指導計画の作成について」

・指導計画が学校行事とタイアップされているので、子どもが課題に対して最後まであきらめないで取り組めている。夏休みや冬休みの実践のように家庭での実践に生かされている。

・指導計画が、２年間で何を抑えていくのか明確になっている。指導内容が順番に配列されていて分かりやすい。ミシン製作の段階的な指導はどのようになっているのか。

⇒５年では、時間内で出来上がる物を作る。６年は、行事（日光修学旅行など）と関連づけて、目的を決めて作る。

・年間指導計画についてあまり実践できていない。中学校まで見通すのは難しい。総合的な学習の時間・生活の中で家庭科の内容を取り入れるのも方向性として間違っていない。家庭で実践する力を付けていく。

・２・３月に振り返って、よかったところ、見直すところを加えて計画を作成する。

・ガイダンスの中で行事を中心に行い、自分たちの意欲につなげる。題材の入れかえ、地域性、児童の実態、季節を配慮して計画を立てる。活動を短いスパンで行い、体験を積み重ねる。

（2）　言語活動の充実について

・「玉結び、玉止めの歌」はどのような声かけがあったのか。

⇒子どもの意見をまとめて歌にした。広がった意見を収束させるような育てをしている。友だちに教えたり、伝えたりするときによい。教師の言葉より伝わる。問題解決的な学習の工夫は、言語活動の充実につながる。

・夏冬の実践報告会を充実させている。家庭ウォッチングや実践ワークシートの工夫、ペア学習などを行う。イメージマップなどの活用の仕方を考える。

・一人ひとりの実践を大切にする。自分の考えを広めるために、言語活動が必要なので、ポスターセッションなどは、全教科で行う。

・家庭科の用語を使い、子ども自身が気づいたことをプリントにまとめる。意図的に場の設定をすることも大切。家庭の調べ学習や実践が無理な場合もあるので、調べた子の情報を広げる。発表を聞いて後から付け足すなど交流をする。

・自分が分かったことを伝え合うなどして、特別なことを行わなくてもよい。家庭科の用語でやることの意味を考え、実践につなげる。友だちの意見を聞くことで、自分の語りを増やす。

4　まとめ（指導・助言）

家庭科は、五感を使って学びを創ることができる。なぜ家庭科で作るのかというと、自分で作るということに思いがこもり、大切に使うという気持ちにつながるからである。また、材料を選び、活用するという意味では、消費者としての目も育つ。しっかり教えることは、学び方も教えることである。子どもたちの実態や家庭環境によって身に付く速さや体験の多さが違うので、子どもの実態をよく把握し、地域性を生かした実践的な学習を行う。

子どものためだけでなく、先生のための評価でもあるので、題材の最後、学期の評価、家庭に持ち帰っての評価、報告会をもったときの評価など様々な場面で工夫をすることが大切である。子どもたちが自分の生活をもとにして、自立できるよりよい実践を考える。小中連携は、それぞれ情報交換をして、年間の学びのつながりや系統を大切にして行う。